

編定  
輯註

開明  
小說

春雨文庫

第七號

下

35

30

25

20



A 448  
147

春雨文庫第七編卷之下

東京 和田定節著

○第廿七回

井戸端おどかたの會議議長ぎぎぎの鳶とびの嗅くと川柳点せんりゅうてんの戯あそ口くち一  
 て都會とろろの町まちの裏長屋うらながやの情態じやうたいと穿うち得えと一いと言いふべ  
 きまなる然しかばおの地ちの同おなト京師きやうし入あ在ありながながな繁はん華かと  
 遁ひそ一い片田舎梅かたがやうばいの宮みやの町外まちがわれなとど猶なほ所ところ々々裏長屋うらながや  
 も有ありけけは朝あさと夕ゆふ迎むかへ特とくささふ物ものめち井戸いどの賑にぎ

48-7546



の〜水汲む釣瓶の櫛〜米炊手先と夫たり  
よ動ろ〜もせど諸色の相場や世間話〜入る  
甲乙〜ま〜お米が騰貴〜や〜無〜此まア時候の  
宜のよ何と〜事〜ぬ〜オヤ〜天氣のせ  
へで高く成〜のぢや〜無とサ長筋さぬの御人數と  
一野ふか公家さぬが大勢長門へ往てお仕舞をさぬ  
と中山忠光さぬと大將ふ〜松本謙三郎との藤本  
鉄石との〜人〜大和の五條で戦争と始めその

騒ぎが濟〜平野次郎と〜人〜但馬の生野で  
戦争さぬぢや〜由漸く〜安心〜と思ふと  
ま〜何〜長州が騒〜いと言ふと夫〜兵糧  
ふま〜の〜米が高く成〜の〜何〜も知らぬ  
此方人ら〜宜迷惑な〜の〜縁エ〜戦争と〜者  
男と女と寐〜するの〜と思つて居〜大違ひ切  
〜張たりぢや〜御免〜な〜然〜否な話〜有  
よ〜あ〜の長筋さぬの〜家老の福原越後と〜人



だの益田ちよぎの國司こくしのつゝみ人ひとが戦争せんそうをいよいよ出か  
 けて來ると言ふくさ甲「ホンニ其様そのような評ひやうをんぞ聞き  
 うか真正まことの縁ゆかりへ「ア、夫おとこの正銘せいめいの語ことば一どツさ吾われな事こと  
 での無なりぬへ丙世間よせけんが騒さわぐくしの上うへふ私わたしの家のうちん  
 ざうふ麩屋町ふやまちのお店みせが封印あい成なりるので彼あのお店みせの仕しる  
 ぶらり為なて居ゐるのどか手て明あみ成なりり困くるり切きて居ゐる  
 ぞヨ甲左様さようだらうぬへ然ごとが彼あの本屋ほんや俵屋たわやとやら  
 且え那なも矢やむり三條さんぢうさぬや長房ちやうぼうさぬと同おなト様やうな鎖港さかう

家うちとやらで守護しゆご職しやくさまや所司しよし代だいさまぬふ憎にくまれ四條しじう  
 の芝居しばい前で捕とらまへられうとの話わ一どツさう捕手とらての  
 人数にんごうと手玉てたまの様ようふ投出なげだして大おほそう強つよみのことぬへ  
 夫おとこがぬへ逃にげやうと思おもへバ逃にげられるのどか態たいと捕とらま  
 へさせこのどツさ見みて居ゐる者ものの話わ一どツさ芝居しばいの立廻たちまわ  
 どころぢやア移うつへ實じつ見みるので有あうと言いつワ丙「ア  
 彼あのお店みせの且え那なの清兵衛せいべゑといふ人ひとの軍學ぐんがくと鬼き一法いつぽう  
 眼がんの菊きくむさけで黃石わうせき公こうとゆふ被教授おそまうけんじゆ劍術けんじゆの鞍馬くらま



の僧正そうじやうが谷やで宮本みやもと  
 義経よしかげとろりろりの先生せんせい  
 ふ習あそびつ

このごツサ  
 アノ夫おとこごうごう  
 強つよううののごごぬぬへ  
 隣となりり裏うらの腕熊うでくまさんな  
 んんどども喧嘩けんかが好まいいららるる



其先生そのせんせいのちよおその教授けうじゆは宜よううららう負まるま氣きづづひひが  
 無なツツてて然しかが其清兵衛そのせいべゑととのの且那ぢなよりよりか内室うちむろさん  
 のお岩いわさんさんと言いふ方かたが又また一いちづづんん上う手てごごととのの評ひやうを  
 甲あんどヨよ「オヤおやままアあ女をんなの癖くせは其様そのさまは強つよいいノの「あアあは  
 強つよいのぢやア無ないい心往こころむきがサさ「夫おとこぢやア程ほどが能よくツツて  
 實じつが有あるるののごご子こ「ままア其様そのさまををののサ夫そのとががかかとと且那ぢなが  
 居おななくくるる東寺とうじの別荘べつしやうへ引込ひきこままうう久ひさししく成なるけれ  
 ど且那ぢなの慈母おんちちさんさんかかとと且那ぢなの妹いもうとと四よツツみ成なる子こと二ふた



ツムある子と養ひ旦那が牢から出るのを待て居る  
といふと實に感心なりのごとと私きの内の野呂助さ  
んでさく其か内室さんの所へ容子と見え往て来る  
度よ誉るのござ子甲「真正な女ごとと云て私き違か  
その様な者なかりの無福へ無とも〜私きの一  
軒おいて隣りの別嬪と申覧を何か能出来て何様  
を男でも楯がつけたいと言ふぢや無う甲「オヤ彼の  
江戸から来て居る御新造さぬござら困女ござら訣らな

いと言ふ評をんの女工へ段々聞て見ると彼の別  
嬪の新撰組と申のお頭の近藤といふ人の御新造で江戸  
から人な知れたい様と察して来て居るのござつさ夫と  
が何様〜と事々此間ふあり靴ぬぎの土間が廣い物  
ごから其中へ大きな土竈と築してさせとご何と始  
めり積りござら私き違ふやア些由解せな口の〜ホ  
み後へ焼芋屋といふ見〜い無〜然が何でも沢  
山物と煮るのござら若や射の混布さきの卸し屋



由始ゆきめるのなるふ越屋町こやまのお店みせで営業えいぎやうをひらか開ひらきは成なるま  
 での平ひらな仕事しごとも無なから賣う子こよして貫つらひさいりのどこ  
 へ夫おとこよりうまや不ふ思し儀ぎぞと思おもふのは此こ節せうもあり毎まい  
 朝あまのおんの松まつ魚う節せうをか搔かやうをか音ねがな為なるは彼かの家けの  
 下した俣みがつ使つかひしふし出でるは時とき途と中ちゆうで逢あうは前まへの家けでの  
 間まがな透すぐみガリ〜ガリ〜松まつ魚う節せうをか搔かやうのお音ね  
 ぞな為なるは彼かののな何なにぞと聞きくは矢や張ちやう松まつ魚う節せうをかく  
 のどとい言いうは子こ夫おとこから其その時とき入いり口くちの土つち竈かまどのなりも聞き  
 たら夫おとこの何なにを煮ゆる為ためぞと知しらるはなが二ふた三さん日にち前まへは太お  
 そと大おきなおの釜かまをか買かひし成なる〜話わ〜成なるぞ  
 何なにぞと訣くらないは縁ゆかり〜近ちか藤ふじ〜のな人ひとが水みづ性しやうでの仕し  
 らら捕とへて釜かま瀧たきふ〜搔かておるは松まつ魚う節せうをか煮ゆつけ天あま窓まど  
 かと嚙かつて仕しまつ〜との積つりがらうワ子〜左ひだり様さま  
 一いヶが所ところ稻いな荷かり山やまから取とりて来き〜丸まる煮ゆるは様さま  
 所ところが出来でるは〜らう縁ゆかり〜甲こう丙へい〜アアハハ〜アア〜夫おとこから私わたしを  
 由ゆ食たらうワハ〜此こ世よのな様さまは合あ戦せんのな話わ〜を聞きくは女おんなで



も氣きが強つよく成なて来きるわ、男おとこが煮ゆて食くふおな者ものの  
出で来きるざらうヨ生なまでな、何なん様やんな女おんなでも食くふわ、ぬ  
へ、其こうちよもお前まへるんざら、大食おほくざらう、へ、お前まへ  
や除のりて仕舞しまうわね、へオ甲や騒さわぐ、い話わし、思おもひ出でし  
とが、おさんお前まへの所ところへ縫物ぬいものや洗濯せんたくや持もてお出での江え  
戸どわ、来きて見廻みまわ組ぐみの劍術けんじゆの教授けうごうか、だと言いふ渡辺わたべ  
さん、此節このせうさのちり来こない様やうぞ、ね、へ、吉太郎きちたろうさん  
りエ彼人あのひとの彼様おんなより優やさしく、のて女おんなよ、くても可愛かわいら、

し成なるざらう、と思おもふ様やうな顔かほで居ゐるわ、大層強たいせうつよつと  
ぬえ夫おつとざらう、程ほどの宜よろしい言いて居ゐるよ、似合にあお戦合いくさあ  
が好よなめ、頃まと言いつ、飛出とびだす氣きぞと見みへて、此間白こゝまひら  
の筒袍つづろや洗濯せんたくよりのつて、お出での時重ときちかそう、ありのや肌かわ  
着きふ、い、お夫おつとの何なんで、スと聞きく、鎖帷子さざりかぶぞと言い  
たが、彼様あんなな物ものや着きこんで居ゐる位くらいな、お特とくんで往ゆ  
こ洗濯せんたくのさ、取とりよ、お出での間ひまが無なし、見みへて、夫おつと  
まけりの置おきつ、さ、お夫おつと然しから、ん、お夫おつとで、お在ゐ



の所へか届け申さうと言ふけれど夫ごと家へ出掛  
てお出が無む江戸や横濱の話しや聞たり又戯弄  
たりして遊ぶるが出来なぬゆゑなまは持て往て上  
ぎと宜と無理よ留て置このごア子へアアアか前を  
んぞの氣樂ごヨ私きごちやア俵屋さんが彼様よあ  
つこので願や釣上らして居るのみ終へ甲それゆ  
も近頃の江戸ツ子も大層上ツて来て中ふの氣の利  
い好男子が有けれど渡辺さん位おなのの少なるよ

めいも成ツラけ此方へ呼附るやうよか為ヨ私きゆ  
急行の加勢よ往むかへこんどか出があるよ知らせ  
るわ少信度か出ヨ玄氣者ごあ少一所よ騒ふと何様  
よ面白いごらうへ夫ぢゆア江戸わ少上ツと人で若  
い者ハ當然年寄ごさへ女よハツ掛らなぬ者ハ無の  
ごあ少渡辺さんも定めし何処らふ情婦や接して有  
るごらう終へ私きゆ左様思つごあ少探りや入れ  
て見ごら此方よの来ご其様る者ハ出来なぬヨ夫ご



わが私わがきの家うちをんぞよ長ながく遊あそんで居ゐるのぢやねわ  
前まへや何なに様さまう仕しやうと言いふ存ぞん心しんをのぞらうわア、レ左さ  
様さま肯かくの出で雲うの問と屋やで卸おして呉くれならぬのごヨ然さがか  
前まへも知しつてお在ゐる横よこ町まちのお遊あそさんが且かつ那なや欲ほしが  
つて居ゐるわが彼かの様さまを大人おとなのいので世せ話わやしても  
宜よろしと思おもひ渡わた辺へさんよ其その事ことを持も掛かると自おの己のハ女にハ海う  
免あぶ少すくし優やさしいことでも言いれると直まふ熱あつくある性しやうが  
かへ往ゆなり首くびつとけ所ところが鬚ひげツ節ぶしも見みえたくある程ほど

嵌こめて仕し舞まのつりお立たと投なり出でされ起お請こも誓ちか詞ごも  
紙かみ屑くず屋やの凶あや厄やく介けと成なて仕し舞まのごら迎むかひ出で来き後ご  
へ位くらいへあふ色いろ氣けと食く氣けと断ことちて仕し舞まふと思おもひ蛸とこ  
薬やく師しさぬへ願ねがやがかけ食く氣け一方い方かたと極ごくとわが食くつく  
あふ馬うまよ履はきせる草くさ鞋せでも白しろ人ひと控くわ移うつの炭すす圍いでも手て柄えら  
で届とどく親おや父ちちの小こ言ことでもおおかおさんの臂ひ劍けん突つても投なり  
ままひひをく食くふ積つりごをんのと胡こ麻まかし請こ附りをい  
わが男おとこが好よくつて程ほどが好よくつて優やさしいつて切きれ放な



れが好くツて女の惚ろの解があるの女が惚ろは手  
出さな男の十人一人も無いと言ふのは渡辺さ  
ん斗りのお遊さん程る女が旦那は迷ツて居ると言  
ても耳へ入れぬ割輕さこそおかり話し少しも相手よ  
なまのいのサ夫ごら合宿をまのくお在の吉沢さ  
んが縫いのサ持えよ来し時間で見え横濱は深く  
言ひ交し女有て其寫真を食は隠し持て居るお  
ら或日酒は酔て眠り込んど呀々附こま徐と出して

見て遣ら実よ彼の寫真の通りを好女サと誕  
飲込をながくお話しゴツゴツ夫ごら何程惚とツ  
て無多なのサ憎のぢやアおのり移く  
先よ一人ごらお情婦有のよ遠慮して惚ろ居  
らねる位を真正は惚ろのぢやアおのり前由左様  
ごお遊さんよ取持て遣うといふのが真正の氣を  
だる実の大指の目や忍んで自分ご自分よ取りつて  
貫ひといのぢや外の者の惚ろの繩張りよ寫真を



んぞのよやお言ひのころうと釣瓶を掴み放  
し腋の下を搦れば此方の米か一桶をかき  
よつと飛除とちん毎日来つひの油屋が油桶を擔ぎ  
油で四座の油を油の宜しう天秤棒のおと  
ギシ

○第二十八回

爰よます近藤勇の妻お美弥の勇と共に京師入堂り  
住居を梅の宮の傍りよ求めて竊りよ此処

中よの有るりのわら世の中追く騒がしく成り社  
勇の夫を鎮めんが為よ新よ募集されたる新撰組の  
頭なる故寸時由心の休まる間なくお美弥ゆこれ  
助くるの才機あれが同ト思ひよ苦しき去年の八  
月も長助の人数堀町御門の守衛を免ぜられ七卿の  
方く長人と共よ長門へ下向有りし時既に戦争よ  
成らんりとの勢ひなりし故勇はお美弥よ落往



んぞのよやを言ひのぞらうし釣瓶と摺りしと放  
一腋の下と搦れれば此方の米か一桶をかきしと  
よとと飛除とたん毎日来つひの油屋が油桶と搦ぎ  
油で四座の油を油の置しう天秤搦のおと  
ギシ

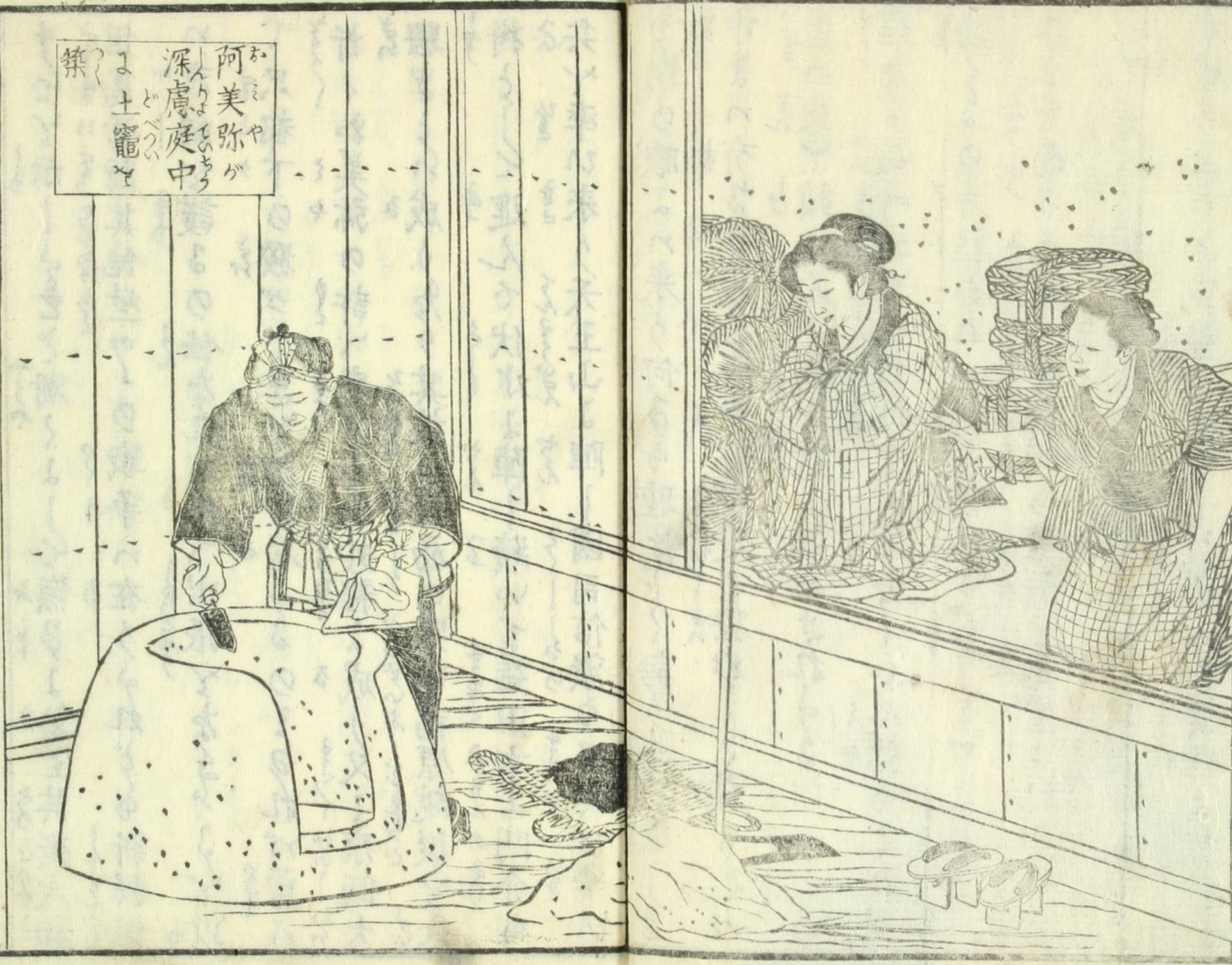
○第二十八回

爰よまゝ近藤勇の妻か美弥の勇と共に京師へ入り  
住居を梅の宮の傍りよ求めて竊りよ此処よ居り

中よの有るりのわら世の中追く騒がしく成り社  
勇の夫を鎮めんが為よ新よ募集されし新撰組の  
頭なる故寸時も心の休まる間なくか美弥ゆこれ  
助くるの才機あれが同ト思ひよ苦しき去年の八  
月も長筋の人数堀町御門の守衛を免せられ七卿の  
方へ長人と共よ長門へ下向有りし時既に戦争よ  
成らんりとの勢ひなりし故勇のか美弥よ落往



お美弥が  
深慮庭中  
よ土竈ヤ  
築





すして示しとど漸くよして無みよ済と其後天和  
但馬常陸其他些々の戦争の在りしれども新撰組  
の京師を護るの任をれば他へ出張をなさざるを以  
て只都下の騷がしきや防ぎ居るのさるれば勇の  
折くお美弥の許へ来りしよ此程は成り又く京師大  
騷ぎとい成りたり其故の長筋の軍勢福原越後と大  
將とて進んで伏水は陣に續いて益田右工門介も  
兵を率ひ来り天王山は陣に國司信濃も又兵を率ひ  
来り天龍寺は本宮を構へたり因て近藤勇も隊下を  
率ひ備へて固めて其変動を窺ひ居るの折をればお  
美弥の許へ断て音信をたりたり然れどお美弥  
の此前は万一の事ありし時の進退の聞き置し故  
にせむとせむ只夫勇が戦場は働くの助けをせんとす  
夫一居たりしか何思ひけん近辺は居る左官を頼み  
入口の土間廣らるなるを以て側らの隅へ大いなり  
土竈を築立させ十分は火の燃る様をたりたり他の



家での近在へ荷をさそび年寄子供などの其処へ逃  
まの被処へ落せのといふ騒ぎを為れともか美祿の  
夫らよ目や掛せ下女のお鍋は打むらゝ一軍が路は  
ると言て世間でいそん大騒ぎをまするが吾侪の家  
よの年よりの居ま子供のを一特は此辺の場を名に  
四方近所が野ひろく何よも怖るるのをいひのさ  
何方へ逃やうとお好く次第ごうね夫ごう女の癖  
よ悪く怒やかゝるとか思ひごらうが彼様いつ時よ

物を買と世間で捨りよ為るかと思ひ大きなお  
釜ごの荷ひ桶ごの御膳籠ごのを買こゝの買込んど  
か折角買こゝんでも其か釜や掛る物が無つちやア話  
らないうゝ土竈を築立させごのどがまや此様を大  
まのか釜や何よ遣つて宜らう給へ且那が御覧よ成  
たふ無か笑ひで有うと思ふヨ一然けれども且那さ  
まの大きなとがお好く為居かゝお焼くひをさし  
ままぶらう夫して此竈で味噌豆でも煮るうか行



水みづのか湯ゆでも沸わきようの十分じふぶんと存ぞんトうまま美美ホホニニねねく  
まま夫うよよ志してても何なにる急いそよ用もち立たるるが有ありるををななも  
の。オオヤヤ宜よろみみと考かんへ出いしし此こ方かたでで何なに様さまぞぞ江え戸とど  
と夜よ少すく大おほききの火かるる有あると其その火かるる場ばのままつりり一い夜よ  
鷹たか蕎そば麦むぎううりりどどの館あはは温う飽ん屋やどどの沢とく山さん荷にと仕し込こ  
んで出でて往ゆき賣うりりめめるるのどど日ひ為なると火か事ごとへ出いで人ひと  
が腹はらを空くうしても食くふ物ものが無ないので困こまり食くふふの夜よ鷹たか蕎そば  
麦むぎ屋やどどの館あはは温う飽ん屋やへ来きて食くるる大おほ層そう賣うてお

金かねを儲たくわけるると言いふ話わト夫うがが長なが州しゅうと申ますすのの人ひとが  
合あ戦せんを初はじめめ二人ふたりででお辨べん當とうを拵とうう賣うりりぢぢやアアな  
いりり开ひきき其その儲たくわええお前まへと半はん分ぶんをけけよよ一い帯おびでもお  
揃そろひひよ買かいいぢぢやアアののハハレレ貴あいい様さまと申ますす合あ戦せんの  
中なかでで人ひとををみみが出で来きままめめのり子こ氣き樂らくををるるむむりり  
美美仰おほまますすト夫うのの前まへが知しららなないいああ左ひだり様さま思おもふふの  
どどと言いつつ吾われ存ぞんの知しつつ居ゐるる様さまどど本ほんや何なにうう書かい  
てあるるののをを見みると軍いくさと申ますす言い講こう釈しゃく師しのの話わををみみどどを



の無なのごヨ 此この京都みやこの天子てんしさぬが能よく為な居ゐまて政事せいじヲ  
取とるか人ひとの居ゐる所ところをのて保元へげんの軍平治へいじの軍いくさまて足  
利りの御代ごよでの数限かぎりも知しれぬ程合戦あつせんが有あり  
由應仁むねひとの乱らんと言いて細川勝元ほそがわかつげんとつみ人ひとと山名宗全やまなむねぜんと  
つみ人ひととの軍いくさの両方りやうほうとも都みやこの中なかに居ゐて諸大名しよだいめいが二  
分われよなり何年なんねんもく戦いくさツこのごけれど京都みやこの町  
がななくありゆせむ夫おとこが為なる其土地そのちに住すんで居ゐるゆめ  
が死しんでも仕舞しまいのたのごかゝ軍いくさやど怖おそいのゆめ

無ならうと思おもふヨ然しかれども御所ごしよの繞まわりごの閑白かんぱくさ  
まの近所きんじよごのまて二条にじょうのお城守護職じやうごしゆごのお屋やりき所  
司代しごのお屋やりきの程近ほどちかや國くにへ出で海道かいどうまぢみ林はやしに  
て居ゐるところの合戦場あつせんばに成ならなるとも言いれぬ故大  
膽たんとて言いて居ゐられなると此辺このへんの街道かいどうまぢま  
ちりの無辺鄙軍むへんびくが始はじまりても鉄砲てつぱうの音ねや耳みみより放はな  
火ひの煙けむりや見みて居ゐるをわたり怖おそいの些ちとも無なのごか  
ら其時そのとき辨當べんたうや持もちらくて賣うり軍いくさよ追おい腹はらや空そらへ逃にげ



来る人多いので能賣れ火事場のまわりの夜鷹番  
 麦どころでい無のと思ふヨ然わす年當屋や遣て見  
 やうぢゆアなのうか前より吾儕の方が沢山をうら  
 くヨ。オホ~~~~一成やど昔一の軍のお話しやお耳申  
 して見ままゝと軍人どうしの格別町の者や女子ども  
 が故なく殺されしり家々が愈々あつての仕舞ひ  
 ませぬ様ざらふお作通り并當屋や遊むして御覧な  
 さいる私一人か煮染の蒔蒔や煮つける役も成ませ





其場そのをも成なりくく矢張やう葷弱こんじやくの煮なわはよ成なるののざららうと  
思おもふヨよへ今いまツつかかし看けん板ばんヤや出でしてお置おきなさいナ御おん弁べん  
當とう軍ぐんもどまり次つぎ弟あに賣う出でし仕し候こうと書かててへへわんわんよ其その位くらい  
な膽いそ力ぢからどと屹ま度どお金かねを儲たくわけるけれど移うつへへ眞ま正せいよ  
弁べん當とうやや成なるさるののなな御おん煮に深ふかの種たねを早はやく買かいこんで  
置おなないと往むかままさいさい先さき刻ときを遣つひひよ出でし時とき荷に物ものを車くるま  
よ積つぐり擔かついいぐりぐりして田い舎やの方かたへ逃にげげて参まるるののののヤ  
大層たいそう見みかかけけまま今いまよも始はまるるののりり知しれれませ

んんワワ然ぜんかかままの精せい出でして松しょう魚ぎょ節せつを搔かくお呉くれよお  
米こめの搗あ揚らたたのの幸さいひ何なん儀ぎも買かい込こんでで醬しょう油あぶらも買かい込こ  
んんだだかかしし沢たく山さんあある竹たけの波なみも上う草くさ履づきを造つくらせせ一い生せいあ  
る程ほどつつんで置おくと思おもひ取とりよせせここししまるるわわトト言い  
ひああけけ少せう考こうえ彼かのの月つきヶ瀬せああら来きし梅うめ干ぼしの物もの置おけ  
入いれれししけけり移うつへへハハい彼かのの塵ちりも成なるららない大だい丈ぼう夫ぶな  
とところころへ仕し舞まいすすハハ夫それでハハトああの薪まきもままど沢たく山さん  
有あり移うつへへ三さん日にち四よ日にちの燃もししけけよ為いても無なかり



の致すせん然らばアノ松魚節ハ此間ツから何本搔ま  
しう鼠入らざのにお引出し何由塞り誠に入りの  
よ困りませわら夫より切鯛より私ハ煮方よな  
り蒟蒻とりり小様な物や些仕入れてお置なさいま  
しなへまも左様ごう松魚節をかりハ急よ搔な物  
だわら入物が無れば筆笥の引出しや明て入るわら  
思われ沢山搔てお呉お前よも食させ吾済も食力や  
出し働くわらサへ江戸でいどうで御座いませわら

此方らで賣か煮深ハ味淋と砂糖と醤油や入るわら  
り松魚節ハ遣ハないらと思ひませわと言れてお美  
弥ハ口隠りしが左様写て見ると江戸でも幕の内  
の煮深深なハ味淋でわら味や附て有らと思ふ  
ヨ然けれど此方で拵へる并當ハ松魚節や思われ入  
れ味淋やお廢しの新製と仕様ぢやアないら一貴療  
がお氣のお強いので私ハ強くなり合戦の初ま  
るや待人の迹るよも構ハま握飯や拵へしりお煮深



と煮<sup>ゆ</sup>つりまる積<sup>つ</sup>りでの座<sup>ざ</sup>いませが怖<sup>こ</sup>さや耐<sup>た</sup>つて  
働<sup>はたら</sup>くことが出来<sup>でき</sup>ませう其時<sup>そのとき</sup>は成<sup>なり</sup>て見<sup>み</sup>なひきば自分<sup>じぶん</sup>  
よも何<sup>なに</sup>ぶら分<sup>わ</sup>りませんワ美<sup>美</sup>一<sup>一</sup>オホ一<sup>一</sup>開<sup>ひら</sup>きや吾<sup>われ</sup>侘<sup>ぢ</sup>れ  
がツて耐<sup>た</sup>へられる耐<sup>た</sup>へられる知<sup>し</sup>れないのサ然<sup>しか</sup>  
わぶ餘<sup>あま</sup>まり怖<sup>こ</sup>く成<sup>なり</sup>つ何<sup>なに</sup>も彼<sup>かれ</sup>も投<sup>な</sup>り出<sup>で</sup>して逃<sup>に</sup>て仕<sup>し</sup>  
舞<sup>ま</sup>うワ子<sup>こ</sup>一<sup>一</sup>オヤオヤ焼<sup>や</sup>いまなう安<sup>やす</sup>心<sup>こころ</sup>で座<sup>ざ</sup>いまま  
ヨ。オホ一<sup>一</sup>  
お美<sup>み</sup>弥<sup>や</sup>がわくの如<sup>ごと</sup>き准<sup>じゆん</sup>備<sup>び</sup>や做<sup>し</sup>何<sup>なに</sup>らの用<sup>よう</sup>は達<sup>たつ</sup>さん

とあるうお梅<sup>うめ</sup>と吉<sup>きち</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>らう</sup>の成<sup>なり</sup>往<sup>むか</sup>お岩<sup>いわ</sup>が別<sup>べつ</sup>荘<sup>しやう</sup>は困<sup>くわん</sup>苦<sup>く</sup>  
まる等<sup>らう</sup>のるの猶<sup>なほ</sup>編<sup>へん</sup>や次<sup>つ</sup>ぎおひくは解<sup>と</sup>分<sup>ぶん</sup>るや脚<sup>くわ</sup>  
覧<sup>らん</sup>阿<sup>あ</sup>らんごん希<sup>こひ</sup>ふ

春<sup>はる</sup>雨<sup>あめ</sup>文<sup>ぶん</sup>庫<sup>こ</sup>七<sup>しち</sup>編<sup>へん</sup>下<sup>げ</sup>之<sup>の</sup>卷<sup>まき</sup>終<sup>つひ</sup>

東京書局出版  
田代



明治十五年十月廿五日御届

編輯人

和田定節

下谷區坂本町二丁目十四番地  
東京府士族

京橋區弥左工門町十三番地  
東京府平民

東京書肆出板人 武田傳右衛門

長野縣善光寺

小栢屋

發賣書肆 西澤喜太郎

茶著延房編集

浪華史略

五編近刻  
出版

一名難波戰記

波多野英一先生著

小學用文填字法全一冊

霞峯片桐先生書

山々亭有人著

赤穂烈婦銘々傳 全一冊

孟齋芳虎画

葛飾為齋畫

花鳥漫画早引

初編一冊  
二編近刻

彰義隊大野八郎遺稿

上野戰爭記

半紙本  
全二冊

鮮齋永曜画

松村春輔編輯

近世櫻田記聞

全七冊

彌左工門町十三番地

東京書肆 文永堂 武田傳右衛門

明治十七年三月二日

010190508337



